「法華経の智慧」について（講演要旨）

須田晴夫

１９９６年に「法華経の智慧」の単行本が出版される頃から「法華経の智慧」について語ってほしいとの要請が寄せられることがあり、それに応ずる形で何回か講演をさせていただいた。読者の参考に資するため、その要旨を掲載することにする。

法華経について池田大作先生と創価学会教学部幹部との座談を機関誌「大白蓮華」に掲載しようとの企画が持ち上がった時、若干（じゃっかん）の戸惑いを覚えた。「なぜ今、法華経を取り上げるのか」という思いが生じたからである。というのも、創価学会の歴史において法華経を正面から取り上げて論ずることは、第二代会長戸田城聖先生が戦後の創価学会再建に当たって法華経講義をされて以来、戸田先生の他に誰人も行ったことがない事業であるからである。その歴史的な仕事を池田先生が行おうとされることに教学部がお手伝いさせていただくことは無上の光栄であり、緊張しつつ準備に着手した。

しかし「なぜ今、法華経か」という当惑は、実際に先生との座談が始まるとすぐに解消した。今こそ法華経を通して日蓮仏法の偉大さを広く宣揚（せんよう）すべき時であると思うようになった。このことについて、本日は申し上げたい。

「法華経の智慧」について、ある人がこんなことを言っていた。「法華経の智慧」には仏教の歴史の全てが入っている、と。要するに、釈尊から天台、伝教、そして日蓮大聖人はもちろん、更に牧口先生、戸田先生、池田先生という創価学会の精神を含めて、仏教三千年の精神が入っている、というのである。

言われてみて、「なるほど」と思った。確かに池田先生は法華経を通して、釈尊から創価学会に至るまでの仏教の全体を論じられている。その戦いを通して、先生は 21 世紀に展開される創価教学の基盤を作ってくださったと思う。

○世界広布のための教学

「法華経の智慧」の意義についてはさまざまな角度から論じられるが、私なりに考えていることが二点ある。第一は「世界広布のための教学」ということである。もう一つは「創価学会の正統性を証明する教学」ということである。

まず第一の点について言えば、池田先生が言われたことがある。それは、「日蓮仏法だけでは直ちに世界の人々には分からないよ。しかし、法華経や釈尊ということなら分

かる。だから、まず法華経や釈尊を通して世界の人々を日蓮仏法に導いていくんだ」という趣旨のお話だった。

この指導は、私自身の体験を通して「まさにその通りです」と深く納得できるものであった。というのも、１９９０年に青年部の訪問団の一員として初めてインドを訪問させていただいた折、デリー大学やネルー大学などの教授の方々と懇談する機会があった。「創価学会インタナショナル（SGI)」とはどういう団体かという説明が求められた。私は当然のように「日蓮大聖人の仏法の団体です」と答えたが、インドの先生方は怪訝（けげん）な顔をしている。そこで、「南無妙法蓮華経の仏法の団体です」と言葉を重ねたが、なお怪訝な表情は変わらない。聞いてみると、「日蓮」も「南無妙法蓮華経」も初めて聞く言葉だというのである。要するに、インドを代表するような大学の教授であっても日本仏教の知識はほとんどないということが分かった。例えば「聖徳太子」などと言っても全く分からない。

私たちは当惑したが、あきらめて帰るわけにもいかない。そこで話題を変えていろいろな話をしていったが、たまたま話が法華経ということになった。すると、先生たちの顔がパッと輝いた。「法華経（ロータス・スートラ）ならば私たちにも分かりますよ」というのである。そして話題が「釈尊」ということになると、そこはもちろんインドであるから、教授たちは「釈尊という方はこういう方ですね」と、とうとうと論じ始めた。

実際に法華経や釈尊を通して初めて対話が可能になった。そこで、「創価学会は釈尊と法華経の精神を継承した日蓮大聖人の仏法を現代に実践している団体です」と説明して初めて創価学会を理解してもらうことができた。このような体験があったので、「いきなり大聖人の仏法の中身を世界の人にぶつけても、まだ受けとめられる状態ではない。だから、法華経から入っていくんだよ」との池田先生の言葉の意味がよく分かったものである。

大乗仏教においては、宗派を問わず、一つの教えの中には「序分」「正宗分」「流通分」という三つの区分がある。教えの中でもっとも中心の部分を正宗分、そこに導くための導入の部分が序分、そして正宗分を人々に弘めていく役割に当たるのが流通分である。この法理に照らして言うならば、末法における正宗分の教えは何かと言えば、いうまでもなく日蓮大聖人が説かれた三大秘法の南無妙法蓮華経である。これが根本であり、中心である。それに対して釈迦仏が説いた二十八品の法華経は南無妙法蓮華経に導いていくための序分であり、南無妙法蓮華経を弘めるための流通分に当たる。この点について

池田先生も旧版の創価学会版法華経の序文で「二十八品は、三大秘法の仏法の序分として流通分として用いるのである」と明言されている。

また、池田先生は「法華経が分かれば大聖人の仏法が分かってくる。大聖人の仏法が分かってくると法華経が分かってくるんだ。両者は表裏一体だよ。仏の心はひとつなんだ」とも言われている。「法華経の智慧」は現在の私たちへの指導という面もあるが、池田先生の眼は未来へ向いている。「世界の人類を大聖人の仏法の功徳に浴させなければならない」と。そのための教学の展開であると思う。

○創価学会の正統性を証明する教学

二つ目は「創価学会の正統性を証明する教学」という点について。正統性とは文字通り「正しい伝統」ということ。つまり、「仏教三千年の正しい伝統」を今日に継承しているのが創価学会であるということを発信していく教学であるということである。

宗教の教団にはユダヤ教、キリスト教、イスラム教などを見ても千年を超える長い歴史を持つものが多い。それに対して創価学会は牧口先生、戸田先生が創立してからまだ百年にも満たない。とくに世界的な展開が開始されたのはまだ５０年ほどである。そのためか、世界的にはまだ創価学会・ＳＧＩがよく理解されていない面がある。一部にはカルト、セクトではないかという偏見をもって見る傾向もある。そこで、創価学会の教学はこのような偏見を打ち破っていかなければならない。すなわち、創価学会は他の世界宗教から見れば比較的に歴史の浅い教団ではあるが、思想・教義の面から見るならば、仏教本来の精神と思想を現代に正しく継承している教団であるということを説得力をもって世界に示していくことが不可欠となる。

ここで重要なのが「三国四師」という言葉である。これは「顕仏未来記（けんぶつみらいき）」という御書の末尾にあるものだが、三国とはインド・中国・日本、四師とは釈尊・天台大師・伝教大師・日蓮大聖人の四人を指す。仏教はいうまでもなく、インドの釈尊に源流がある。その釈尊の教えは膨大な数の経典に説かれているが、結局のところ法華経に集約されている。その法華経の内容を整理して一念三千の法門として示したのが中国の天台大師である。その天台の思想を日本に弘めたのが伝教大師である。そして、法華経の教えの真髄である南無妙法蓮華経を末法に弘通したのが日蓮大聖人である。すなわち、釈尊・天台・伝教、日蓮大聖人という系譜こそが仏教の本流であるということが「三国四師」という言葉の意味である。

それでは日蓮大聖人のもとにある仏教正統の精神は、今日どこに継承されているか、ということが問題となる。その仏教正統の精神を現代に継承し、実践しているのが「日蓮大聖人直結」の教団である創価学会であるということを示したのが「法華経の智慧」の趣旨である。

○法華経は三大秘法弘通のための「手段」

次に、「日蓮大聖人と法華経の関係」について確認しておきたい。

教学上、これは非常に重大なテーマである。なぜかというと、世間の人々には、ここのところが良く分かっていないからである。世間一般の日蓮宗すなわち日興上人以外の五老僧の流れを汲む人々にとっては、法華経二十八品を修行して法華経を弘めた方が日蓮大聖人、という理解なのである。御書において大聖人が「法華経の行者」と言われているのだから、大聖人は文字通り二十八品の法華経を行じた方であると受け止めている。しかし、それが大きな間違いである。最初に述べたように、大聖人の本意は法華経二十八品を行じ、弘めるということではなく、法華経二十八品を用いて南無妙法蓮華経を弘めるところにあったと解さなければならない。

大聖人の御本意は三大秘法の弘通にある。法華経二十八品は「手段」なのであり「目的」ではない。法華経はあくまでも三大秘法を弘めるための序分であり、流通分であるということが、世間一般の日蓮宗は理解できていない。大聖人の本弟子六人（六老僧）の中で、この点を真に理解していたのは日興上人ただ一人であった。

法華経二十八品が釈迦仏法の経典の中でもっとも偉大な経典であるということは、天台・伝教が既に明確に示していた。日蓮大聖人は、天台・伝教と同じことをされたのではない。天台・伝教も弘めることができなかった南無妙法蓮華経を弘められたのである。

では、なぜ大聖人は法華経の身読ということをされたのか。それは、当時の人々の機根を整えるための御振る舞いであったと考えられる。

仏教において「機根」というのは非常に大事な問題である。仏法の化導といっても相手に聞く耳がなければ成り立たない。仏がどれほど救ってあげたいと思っても、衆生の側にある程度仏の言葉を聞き入れるだけの土壌がなければ化導することはできない。そこで、化導に当たっては、衆生の機根を整えるという営みが必要となる。

「法華経を身で読む」ということは、大聖人が法華経に予見されている通りの数々の難に遭いながらも倒されなかったことをいう。大聖人は、社会全体による悪口罵言や国

家権力による死罪に等しい迫害に遭いながら、一切の難に打ち勝ってこられた。

このことは、大聖人に敵対する立場の者たちであっても認めざるをえない客観的事実である。そうなると人々の心に「日蓮という人はただ者ではない。ただちに帰依できるかどうかは別にしても、この人の言葉には真剣に耳を傾けなくてはならない」という心が起きてくる。このように、大聖人は法華経が予言した通りの大難を受けきることによって、人々の心を動かし、仏法を受け入れる機根を作っていかれたのである。

他国侵逼難、自界叛逆難という予言の的中も法華経の身読と同様の意味があったと思われる。予言の的中も明確な事実である。実際、蒙古の国書が到来し、蒙古襲来の危機が現実になるにつれて日蓮大聖人に帰依する人々が急増していった。大聖人は誰人も否定できない客観的事実を示すことによって仏法を弘通していったのである。

○法華経は末法のための経典

最後に結論として、法華経とは誰のために説かれた経典なのか、ということを確認しておきたい。

まず法華経には二重の意義があるといわれる。二重の意義とは釈尊在世のために説かれたという面と釈尊滅後のために説かれたという面の二つがあるということである。二十八品のうちの人記品第九までは釈尊在世のときの衆生のために説かれた部分であり、法師品第十から以降は釈尊滅後なかんずく末法の衆生のために説かれた部分であると分けられる。

釈尊在世の衆生のために説かれたとは、法華経が明かされてはじめて一切衆生が等しく成仏できる道が開かれたということをいう。爾前経では成仏が叶わなかった二乗や悪人、女人が初めて成仏できることになった。舎利弗を初めとする釈尊の十大弟子も法華経が説かれて初めて成仏できることになったのである。最高の弟子である十大弟子さえも救済できないのであれば釈尊の化導全体が無意味なものとなってしまう。すなわち、法華経がなかったならば釈尊の教えが虚妄となる。法華経こそが釈迦仏法の結論、眼目であり、法華経が説かれたことによって他の一切の経典も意味を持つことができたのである。

仏在世の一切衆生を救済することは人記品までで完結しており、その意味では法華経はそこで終わってもよいとも言える。しかし、法華経はそこで終わらない。法師品第十からは新しい流れが始まっていく。それが、釈尊滅後の衆生のために説かれたという法

華経の第二の部分である。

法師品から以降、一転して釈迦仏は自身の滅後について語り始める。自身の入滅が近いことを説き、仏滅後、誰がこの正法を弘めるのかと弟子たちに問うのである。声聞や菩薩などの仏弟子たちは仏から滅後の弘通を促されて、当然、「私たちにさせていただきたい」と申し出る。しかし、従地涌出品第十五に至って、釈尊は「止みね、善男子」と彼らの申し出を拒絶する。末法は大難が吹き荒れる悪世であるから、その難に耐えて妙法を弘めることはお前たちのような浅い境涯の者が到底できることではない、というのである。すると、仏の目の前の大地が豁然と割れ、大地の底から六万恒河沙という膨大な数の地涌の大菩薩が出現する。釈尊は滅後末法における妙法弘通を担う主体者として地涌の大菩薩を呼び出したのである。

そして神力品第二十一で地涌の菩薩の代表である上行菩薩に対して滅後の弘通を付嘱する。神力品において釈尊から上行菩薩へと仏法弘通の教主が交代することを示し、末法の人類に対して上行菩薩の化導に従うことが正しい仏道修行となることを明らかにしたのである。

こうして見ると、法華経は末法に誰が、どのように正法を弘めていくかということを予言している経典ということができる。法華経は、経典が成立した時代の衆生を救済するために説かれたという面はもちろんあるが、むしろそれ以上に、釈尊の仏法が救済力を失った末法において妙法を弘通する人の出現を予言し、その弘通を助ける意義がある。

誰のために法華経は説かれたのか、という問いに対して日蓮大聖人は端的に「末法今時の日蓮等が為なり」（「法華取要抄」、御書３３４頁）と答えられている。法華経は釈尊在世の衆生を救うために説かれたように見えるが、そこに法華経の真の意義があるのではない。法華経の真の意義は、末法に出現する本仏すなわち日蓮大聖人の出現を予言し、その化導を助けるために、あらかじめ仏が留め置いた経典であるというところにある。

そして、「日蓮等」と言われていることが重要である。「日蓮等」であるから、法華経が説かれたのは大聖人お一人のためではない。大聖人と同じ心で妙法を弘めていく門下全員のために説かれた経典である。日蓮大聖人と同じ師弟不二の心で妙法を弘通しているのが創価学会・ＳＧＩである。創価学会・ＳＧＩが出現して初めて南無妙法蓮華経が全世界に弘まった。すなわち法華経は、今日、創価学会が進めている世界広布を助けるために留め置かれた、私たちのための経典であるということができる。まさに仏意は甚深という以外にない。何千年の時間を超えて、法華経の本義は今日に現れているのである。

○「救われる弟子から救う弟子へ」

また法華経について、「救われる弟子から救う弟子へ」ということが言われる。十大弟子など声聞の弟子は、法華経以前は成仏できないとされていたが、法華経の会座（えざ）において初めて成仏が許され、救われることができた。しかし、彼らはそこでとどまっていたのではない。今度は、自分たちが師匠の心を受け継いで、師匠に代わって民衆を救う戦いを起こしていった。弟子たちの境涯が変わっていったのである。つまり、法華経は弟子が弘める経典であり、妙法弘通のための経典である。だから、民衆救済の実践がなければ、学問的に研究しただけでは法華経の心を理解することはできない。

それでは今日、誰が妙法弘通の戦いを行っているのか。それを行っているのは、事実に照らして創価学会以外にない。だからこそ、創価学会に法華経を語る資格がある。私たち学会員が真剣に広宣流布の戦いを進めている振る舞いにこそ法華経を行じている姿があると確信していきたい。